電波新聞
2025年(令和7年)2月28日(金曜日)

POSデータで事業領域拡大図る

東芝テックの新会社「ジャイナミクス」

生成AIで高品質なデータ提供

東芝テックは、昨年10月1日付でPOSデータを起点に業種を横断した課題解決を行う新会社「ジャイナミクス」（東京都港区、東芝テック100%出資）を設立した。生成AI（人工知能）を活用して分析、店舗のデータドリブンな経営を支援する。「データを賢く活用し、Point of Serviceを提供することで、データをよりサービスに転換するサービスサイエンス企業」を目指している。同社のCPRO（チーフ・パブリック・リレーション・オフィサー）の濱田美樹夫氏に聞いた。

◆

東芝テックは、POSシステムで国内では52%と圧倒的なシェアを誇る。また、世界でも約2割のシェアがあり、トップを維持している。スマートレシートは、昨年7月に会員数が200万人を突破し、導入店舗も約1万7000店舗を数える。濱田氏は「強みであるタッチポイントを起点に事業ドメインを拡大、新たな領域への事業拡大を図っていく」と、東芝テックの戦略を紹介する。

POSデータに含まれている膨大なデータの利活用により、事業領域の拡大を図っていくのが新会社の目指すところだ。「バリューチェーンの全領域でデータのつながった世界を目指すことをコンセプトに、AIとプラットフォーム（データ／DX基盤）を提供する。まずは、小売業内部での価値の幅出し・高度化を行う。次にバリューチェーン全体へ拡大、全ての領域でデータのつながった世界を目指す」と濱田氏は話す。

新会社の狙いを話す濱田CPRO

新しい潮流づくり

コーポレートメッセージは「人のいとなみと情報をつむぎ、次の豊かさの礎をつくる」としている。これには、「リアルデータの膨大なデータを、AIなどの最新技術で価値を高め、扱いやすい形にすることで、本当に求められる商品やサービスの開発と提供を支援し、社会全体の発展のための、新しい潮流づくりに挑戦する」との思いが込められている。

ジャイナミクス（Gyainamics）の社名の由来は、Gyre（ジャイア＝環流、海洋や大気の地球規模の大きな流れ、循環）とAI（最先端のテクノロジー）、Dynamics（ダイナミクス＝膨大かつ多様性のあるデータを扱う）の三つの言葉を掛け合わせた造語で、「リテールの膨大なデータを最新のテクノロジーで変換・活用し、社会により良い潮流を生み出していく」狙いがある。

近年、小売業界ではDX（デジタルトランスフォーメーション）を活用した人手不足の解消や廃棄ロスの削減、最適な販売価格による収益改善などのニーズが高まっている。しかし、これらのニーズに対応するためにはPOSデータに加え、物流や生産など、さまざまなデータを収集・分析する必要がある。また、多くのデータを集めて解析するには、時間とコストがかかり、多くのIT技術者も必要となっている。

新会社は、POSデータを中心に他のデータも統合したデータ利活用基盤を構築する。生成AIを活用することでデータ欠損や不足を補い、仮説検証しながらより質の高いデータを誰もが分析しやすい状態で提供し、経験だけに頼らない店舗のデータドリブンな意思決定を支援する。

また、プロモーション最適化ソリューションの提供や顧客のマーケティング活動も支援することで、小売業をはじめ、業種を拡大して現場の課題解決を目指していく方針だ。